



# 定年を目前に退職し、 大学院に進学した理由

「より深く学びたい」と思った  
市町村アカデミーの受講

私は、父親の仕事の関係で高校卒業まで愛媛県新居浜市で過ごした。高校時代は、3年間野球部に所属し主将を務め、関東の国立大学農学部にて現役で合格し、卒業後は民間会社を経て、昭和55年、父親の故郷である高知県伊野町役場に入庁した。

民間会社に勤めている頃に結婚した妻は、公立小学校の教員をしていた。その後、妻は校長を最後に退職した。

私は、役場に在職当時、常日頃から公務員としてキャリアアップを図り、どうすれば住民のために働くことができるかとの問題意識を持っていて、学習のための雑誌を定期購読したり、業務以外の領域でも参考となる書籍を読んだりしていた。

係長になりキャリアアップを図りたいと考えていた矢先、庁内の回覧で、市町村を

担う人材育成のための研修機関「市町村アカデミー」の受講者募集の案内が目に残った。すぐに希望を出したが、直属の部下が出席することとなり、上司から「1年待つてくれ」と言われて一度はあきらめた。しかし、その翌年、希望通り市町村アカデミーの「政策形成」分野で学べることになった。

千葉市にある市町村アカデミーには、全国の自治体職員が集い、それぞれの持つ問題意識について論議し合う場も設けられていた。私は公務員になって以来最高に充実した時間を過ごすことができた。

市町村アカデミーのカリキュラムは、講師陣も充実していた。書籍でしか名前を存じ上げなかった教授の講義なども拝聴することができ、4日間という短期間ではあったが、刺激的で充実した時間を過ごした。全国各地の他の自治体職員との情報交換、意見を戦わせた経験は、何ものにも代えがたい貴重なものだった。今、振り返ってみる



伊藤 豊隆  
元いの町役場職員

【いとう・とよたか】

昭和27年、愛媛県新居浜市出身。茨城大学農学部卒業後、民間企業を経て、昭和55年伊野町役場入庁。平成24年に退職し、平成25年3月広島大学大学院社会科学科博士課程前期修了。平成25年4月～平成28年3月、島根県中山間地域研究センター、平成28年6月～平成30年3月、高知県社会福祉協議会に勤務。

と、この時の経験が、私の中の「より深く学びたい」という欲求を呼び覚ましてくれたのではなからうかと思う。

転機となった町村合併

平成16年10月に行われた当町の町村合併は、市町村アカデミーで問題意識を持って経験していくことを学んだ私にとっては、とても大きな転機となった。勤務していた伊野町は、高知県内の吾北村、本川村と合併し「いの町」となった。国道194号添いの3つの自治体の合併だった。

吾北村と本川村は、共に山間地域に属する、過疎の著しい村であった。農林業などの一次産業が基幹産業となっている山村は、高齢化率も高かった。高知市に隣接しベツドタウンの様相を呈していた伊野町とは、地勢的にも大きな違いがあった。

しかし、旧伊野町内にも山村振興地域の指

定を受けた2つの地区があり、旧吾北村だった吾北地区と、旧本川村だった本川地区とも共通の「少子高齢化」という課題を抱えていた。

### 合併後、過疎問題と向き合う

私は、合併の相手方であった自治体の様々な情報を見るにつけ「深刻と思える過疎問題と向き合ってみよう」という強い気持ちに駆られるようになった。そこで、異動の希望を出し、合併から間もない平成17年4月、過疎地域の領域に属する本川地区で業務を担う、本川総合支所に配属された。

自宅から本川総合支所までは、距離にして50kmあり、通勤には車で1時間ほどか



住民自治組織立ち上げのための会議に参画

かる。私は本川総合支所の近くに職員用の住宅を借りて単身赴任することとなった。

職場及び宿舎のある地区は、愛媛県との県境に接している。標高約400mで、自宅周辺と比べると気温も低く、静かでもまばらな環境であった。冬には水道管の凍結や積雪も見られる地域で、冬用タイヤが必須だった。私が赴任してすぐに取り組んだのは、本川地区の女性たちの組織化であった。この地区には「本川ジャガイモ」という在来品種のジャガイモがある。少し赤みを帯びて小型の本川ジャガイモは、生産量が少ないため、人気が出ているのに生産が追いつかないという課題を抱えていた。

そこで、我々は「NPO法人土佐の森・救援隊」の協力を得て、町有林を伐採し、開かれた土地を焼き畑手法で畑にして、ジャガイモ用にした。組織した女性グループは「本じゃがクラブ」と命名し、ジャガイモ生産と販売・加工を行うこととなった。

本川地区においては、女性を組織化し活動が見える化されたことで、小さな地域に少し活力が現れたのではないかと思う。私は高知県庁から本川地区に配属されていた「地域支援企画員」とタッグを組み、本川地区初のワークショップを開催したり、地域の課題・資源・将来などについて聞き取り調査を行って報告書としてまとめた。

本川地区に住むようになって、地域住民と一緒に酒を酌み交わす機会ができ、住民との距離は縮まったような気がした。もし

地域に住まず自宅から通勤していたら、おそらく地域住民との親密な関係は生まれなかったのではなからうか。

こうして本川総合支所に3年間勤務した後、今度は吾北総合支所に2年間勤務した。吾北地区では、農作物を育てる圃場(田畑)内に車の入る農道がないため、耕作放棄が進んでいた津賀谷地区において、農道を整備したいという住民の合意形成がなされていた。これを行政としてサポートし、課題を解決する手法として、私は国庫補助事業の導入を提案した。

その事業内容は、補助金をそのまま使って農場を整備するというものではなく、補助金は機械の借り上げ料などに使い、地域住民が役務提供を行って工事を施行するというものであった。この事業のやり方だと、作業道の整備コストが低く抑えられ、整備する農道の延長距離を延ばすことができた。当時の政権交代に翻弄され、国庫補助事業が事業仕分けにより廃止されると、県が実施する別の補助金制度などに乗り換え、総延長1000mを超える農道が、住民の力により整備された。

### 新たな挑戦

過疎地域での5年間を経て本庁に戻った私は、職員の過疎問題に対する認識と、高齢化の進む過疎地域住民のもつ危機意識と間に乖離があることをひしひしと感じ、「こ

んなことで大丈夫なのだろうか」という疑問が増幅していった。

国においては、市町村合併とほぼ同時並行的に地方分権改革が推進され、国と地方との関係は対等という抜本的な改革が推進されていた。しかし、いの町においては、国や県との関係は制度に則り改善されたものの、県への依存的な立ち位置、行政と住民自治に関しては、合併協議の中で話題にすら上らない状況であった。

そのような中、私は「本当に過疎地域の住民の暮らしは守られるのだろうか」という問題意識が頭から離れなくなった。そして、その解決策を探るために多くの本を読み漁った。手にした本の中に、広島大学の戸田常一教授が共著で執筆された『地域政策の道標』があった。この本を読み、地方分権型の政策形成の必要性を改めて痛感し、いつしか戸田教授の下で学んでみたいと思うようになっていった。また、「公務員生活が長くなると大学等で学んだ知識も古くなるので、大学院等での新たな学びなども必要ではなからうか」とも感じた。

私は、戸田教授が教鞭を執る広島大学大学院への受験を決意し、仕事の合間を縫ってオープンキャンパスに参加し、受験勉強に励み、平成24年2月、無事、合格通知を手にした。

しかし、入学に際しては、妻の猛烈な反対に遭った。また、退職すれば職場に迷惑をかけることから、入学手続きをすくなく休学手続きを行い、進学を1年遅らせた。

「教員には在職のまま大学院で学ぶ機会が制度的に保証されているが、自治体職員が退職してまで大学院で学ぶ意味はあるのか」というのが、妻からの指摘だった。その指摘に対する私の回答は100%理解されたとはまではいかず、妻との間にぎくしゃく感が残ったが、1年間の休学期間中に何とか了解を取りつけ、無事、復学できることになった。

### 1年間の休学後、 晴れて大学院生に

合格後、復学までの1年間は、関心領域の論文や学術書を読み込んだ。事例に挙がっている地域の訪問なども積極的に行った。最初の1年間は、仕事を続けながら片道300kmの距離を車で通学し、一部の単位を取得した。

しかし、修士論文を書くためには修了に必要な単位を取得しなければならず、最終的には退職して大学院で学ぶことに妻も同意してくれた。大学院進学のための住まいは、同じゼミの同級生が広島市内の持ち家を格安で貸してくれて、ありがたかった。

大学院では、若い仲間や外国人留学生たちが、夜遅くまで熱心に研究していた。その姿を見て、「ほぼ1年間で単位取得しながら修士論文を執筆する」という厳しい条件でも、負けずに頑張らねばと刺激を受けた。

週1回のゼミの時間は、学生個々の研究計画に対して、先生方から容赦なく集中砲火が浴びせられた。ゼミでのディスカッションを通じて議論する力が鍛えられると同時に、

修士論文を書くための基礎も徐々に形成されていった。

私の論文の指導教官だった戸田教授は、年末年始をはさむ休業期間にもかかわらず論文案に目を通し、宅配便で送ってくださった。その熱心さに支えられ、論文を完成させることができた。

### ゼミ仲間の縁で知った 島根県中山間地域研究センター

大学院修了後の進路について迷っていた時、島根県中山間地域研究センターが研究員を募集していることを知った。島根県中山間地域研究センターは、ゼミ仲間の紹介で縁があった。採用試験を受けて、3年間勤務することになった。

島根県は高知県と同様、深刻な過疎地域である。島根県中山間地域研究センター（以下「センター」という）は、地域の課題を社会科学の視点から分析し、解決をサポートするという全国でも稀有な機関である。このセンターでの勤務により、私は大変貴重な経験を得ることができた。

例えば、島根県ではJA（農業協同組合）運営のガソリンスタンドが、人口減少により経営悪化し、相次いで撤退していた。そこで私は同僚と共に、高知県の先進事例を参考に、ガソリンスタンドの撤退後、地域住民が出資してガソリンスタンドを経営する方法について論文を書いた。また、センターの仲間には様々なスキルを持った研究者がいたの



地元大学生との研究ユニット「タテマエ」のメンバーと（写真後列右端が筆者）

で、私に足りない部分を補ってくれるという意味でも貴重な場であったと思う。

センターでは、支援計画に基づき重点的にサポートする3つの地域を受け持った。ある地域では、水産加工をしている住民の組織が、原料高騰を受け、取り組みを存続させるべきか否かについて迷っていた。その相談を受けた私たちは、経営指標を示し「存続するより撤退したほうが妥当ではないか」という判断材料を提供した。

センター勤務においては、島根県内の市町村職員向けの住民自治組織づくりも貴重な経験であった。研修を通じて住民自治組織づくりの先進地である島根県雲南市、広

島根三次市、兵庫県朝来市の職員とも交流し、その中身についても深く知ることができた。関連して島根県内の住民自治の状況、広島県内の代表的な自治体の状況も学んだ。最終的には、研修の記録をまとめた冊子も発行することができた。

### 高知県に帰郷後は、 社会福祉協議会に勤務

高知県に戻った後は、NPO法人の支援をする業務があったことから、高知県社会福祉協議会に就職した。

高知県社会福祉協議会での1年目は、高知県下のNPO法人の経営分析に携わった。NPO法人のアンケート調査に基づく本格的な経営分析は、県下で初めてのチャレンジであり、零細な収支のNPO法人は、必ずしも経営拡大を志向していないことなどが分かった。

2年目には、高知県庁が創設した、子ども食堂を普及するための補助金制度をサポートする部署に異動した。業務は、子ども食堂開設のための講座や課題を協議するための会議の開催、子ども食堂の事例を紹介するための訪問など多岐にわたった。この制度により、高知県内における子ども食堂の開設は1年間で50箇所を超えるまでに拡大した。子ども食堂の現場では、子どもの置かれている環境を少しでも何とかしたいというボランティア意識を持った、心温かな女性たちを知ることができた。

ここでの業務遂行においても、大学院での学びが大いに役立っていることは言うまでもない。私は、大学院での知識を活かし、子ども食堂の類型化などを試行した。

### 今春からは地域支援にシフト

今年の春、私は高知県社会福祉協議会を退職して、深刻な過疎地域の支援活動をしている。きっかけは、島根県中山間地域研究センターで同僚だった若手の研究者Nさんからの誘いだっただけだ。現在、首都大学東京に勤務するNさんは、いの町で昨年からはじめた、来歴不明な幻のもち米「アラキモチ」の再生活動に関心を持ったという。Nさんは口述調査の手法を活かしてまちづくりに取り組む研究者で、聞き取りを元に地域資源の遺伝子を見出すその取り組みには期待が寄せられている。

Nさんと私は地元大学生との研究ユニット「タテマエ」を結成し、既に大学生8名と共に取り組みを始めた。この取り組みと連動して地域住民側では、個別集落の取り組みの限界性を克服するために、連合自治組織の立ち上げを通じて、住民主体の自治組織づくりを目指している。あわせて、集落営農組織の立ち上げも検討されている。

現在、私はこれらの取り組みをサポートしている。町村合併を機に始まった私の過疎問題に対する取り組みは、これからも続いていく。